

様式6（第15条第1項関係）

平成30年4月6日

独立行政法人
日本学術振興会理事長 殿

研究機関の設置者の所在地	〒183-8534 東京都府中市朝日町3-11-1	
研究機関の設置者の名称	国立大学法人東京外国語大学	
代表者の職名・氏名	学長・立石 博高（記名押印）	
代表研究機関名及び機関コード	東京外国語大学	12603

平成29年度戦略的国際研究交流推進事業費補助金
実績報告書

戦略的国際研究交流推進事業費補助金取扱要領第15条第1項の規定により、実績報告書を提出します。

整理番号	J2801	補助事業の完了日	平成30年3月31日	関連研究分野 (分科細目コード)	言語学 (3201)
------	-------	----------	------------	---------------------	---------------

補助事業名（採択年度） 危機言語・少数言語を中心とする循環型調査研究のための機動的国際ネットワーク構築（平成28年度）	補助金支出額（別紙のとおり） 37,230,000 円
--	--------------------------------

代表研究機関以外の協力機関：名古屋大学
海外の連携機関：オーストラリア国立大学(ANU)、メルボルン大学、ナンヤン工科大学(NTU)、ロンドン大学東洋アフリカ研究学院(SOAS)、ソウル大学

1. 事業実施主体

フリガナ 担当研究者氏名	所属機関	所属部局	職名	専門分野
主担当研究者 ナカヤマ トシヒデ 中山 俊秀	東京外国語大学	アジア・アフリカ言語文化研究所	教授	言語類型論・ワカシ語言語（北米北西海岸）、琉球語
担当研究者 ワタナベ オノレ 渡辺 己	東京外国語大学	アジア・アフリカ言語文化研究所	教授	セイリッシュ語
星 イズミ 星 泉	東京外国語大学	アジア・アフリカ言語文化研究所	教授	チベット語
シワダ ヒデオ 澤田 英夫	東京外国語大学	アジア・アフリカ言語文化研究所	教授	ビルマ諸語
クレイト トクシ 呉人 徳司	東京外国語大学	アジア・アフリカ言語文化研究所	教授	チュクチ語
ヤマコシ ヤスヒロ 山越 康裕	東京外国語大学	アジア・アフリカ言語文化研究所	准教授	モンゴル諸語
アラカワ シンタロウ 荒川 慎太郎	東京外国語大学	アジア・アフリカ言語文化研究所	准教授	文献学・西夏語
シオハラ アサコ 塩原 朝子	東京外国語大学	アジア・アフリカ言語文化研究所	准教授	インドネシア諸語・言語類型論
シナガワ ダイスケ 品川 大輔	東京外国語大学	アジア・アフリカ言語文化研究所	准教授	パントゥー諸語（特にスワヒリ語、ロンボ語）
ホリエ カズカ 堀江 薫	名古屋大学	大学院国際言語文化研究科	教授	言語類型論、対照言語学
計10名				

フリガナ 連絡担当者	所属部局・職名	連絡先（電話番号、e-mailアドレス）
ナカムラ ヨウイチロウ 中村 洋一郎	研究協力係・係長	042-330-5593、kenkyu-kenkyo@tufs.ac.jp

※2頁以降は、交付決定を受けた時点の事業計画の項目に合わせて必要に応じて修正すること。

2. 本年度の実績概要

昨年度の研究を継続し、若手派遣研究者3名の海外連携研究機関への派遣を継続するとともに、若手派遣研究者1名の新規派遣を開始した。また、海外連携研究機関から6名の連携研究者を招へいし、以下の研究を行った。

(1) 一次データの公開研究：

メルボルン大学との共同研究：若手研究者倉部が派遣を受け、連携研究者 Nicholas Thieberger 博士の協力のもと、過去のフィールドワークにより蒐集した少数民族語ジンポー語による民話資料 1805 本の整形とメタデータ作成を行い、全てのデータのアーカイブを行った。また、本事業からのインフォーマント謝金により、民話 393 本（計 1,758 分）の書き起こしを外注した。この書き起こしデータと筆者による書き起こしデータをともに PARADISEC で公開し、合計 879 本の書き起こしデータを無償で公開した。

オーストラリア国立大学(ANU)との共同研究：担当研究者塩原が Sonja Riesberg 博士を招へいしインドネシアの少数言語・危機言語のアーカイブに関する研究を行った。

(2) 一次データに基づくコーパスの構築

・ナンヤン工科大学との共同研究：若手研究者の野元と岡野が同大学の Francis Bond 准教授および同氏の主宰する計算研究室メンバーの協力のもと、本事業の主眼の1つである「言語コーパスの構築」を進めた。具体的には、大規模ウェブコーパスであるライブツイヒコーパスコレクションのマレー語・インドネシア語部分の正しい言語分類による再編成、マレー語・インドネシア語コーパスのための検索ツール、接頭辞、接尾辞などの形態情報での検索を可能にするための形態情報辞書 (MALINDO Morph) の構築を行った。また、日本語、ビルマ語、マレー語、インドネシア語、英語から成る「東京外大アジア言語パラレルコーパス (TUFUS Asian Language Parallel Corpus; TALPCo)」も構築した。

・ロンドン大学 SOAS との共同研究：担当研究者荒川が 12 月に招へいしたロンドン大学 SOAS の連携研究者 Nathan Hill 博士の協力を得て西夏語コーパス (プリンストン大学所蔵西夏文法華経の全文テキスト) の構築を継続した。Hill 博士の協力を得て、録文・推定音・訳注といった書籍スタイルのテキストを完成させるとともに解題・研究編を執筆した。

・メルボルン大学との共同研究：若手研究者倉部と木本が派遣を受け、連携研究者 Stefan Schnell 博士との共同研究により、それぞれジンポー語とアルタ語のデータの言語コーパスを構築した。また、Schnell 博士を 3 月に招へいし、同博士の協力を得て、担当研究者塩原がスンバワ語のコーパス構築を行った。同コーパスは近日中にケルン大学が運営するアノテーション付き口語テキストの多言語コーパス (<https://lac.uni-koeln.de/en/multicast/>) において公開する予定である。

・オーストラリア国立大学(ANU)との共同研究：主連携研究者 Nicholas Evans 教授・連携研究者 I Wayan Arka 博士、Danielle Barth 博士を招へいし、今年度新規に開始した危機言語・少数言語を含む多言語の準パラレルコーパス構築 (SCOPIC プロジェクト) に関するワークショップを開催した。

(3) コーパスに基づく理論的研究

上記(2)のメルボルン大学との共同研究によって開発中のコーパスはドイツの Bamberg 大学の Geoffrey Haig 博士と上記の Schnell 博士が開発した談話における文法関係と有生性 (Grammatical Relations and Animacy in Discourse; GRAID) に関するアノテーションを施してある。若手研究者倉部・木本と担当研究者塩原は Schnell 博士との共同研究の形で上記のアノテーションに基づく理論的研究を進め、論文を執筆・公刊した。また、担当研究者塩原は ANU の連携研究者 I Wayan Arka 博士とコーパスに基づくバリ語の理論的研究を行った。

(4) 一次データに基づく言語の通時的変化に関する研究

ナンヤン大学との共同研究：若手研究者倉部が主要連携研究者 LaPolla 教授の協力のもと共同研究を進めた。具体的には、シナ・チベット語族の言語変化に関する査読論文を執筆し、ラワン語におけるジンポー語借用語の特定とその言語学的特徴を明らかにした。

ロンドン大学 SOAS との共同研究：若手研究者の岡野が派遣を受けるとともに、担当研究者の品川が長期出張を行い、それぞれ連携研究者 Justin Watkins 教授、主要連携研究者 Lutz Marten 教授とビルマ語、バントゥー諸語の通時的変化に関する共同研究を行った。岡野は担当研究者澤田 が収集・翻字済みのビルマ語碑文データのコーパス化について Watkins 教授と検討を開始した。品川は Marten 教授のプロジェクト「バントゥー語の形態統語論のバリエーション」の枠組みでの共同研究を継続し研究発表2件を行った。

3. 到達目標に対する本年度の達成度及び進捗状況

(1) 一次データの公開事業：

日本側研究者が持つ危機言語・少数言語の一次データを広く利用可能な形でアーカイブするという到達目標を順調に達成しつつある。項目2に記したように、29年度には若手研究者倉部がジンポー語の一次データを転写つきの形で連携研究者 Thieberger 博士の協力を得てアーカイブ・公開した。コレクションを全てオープン・無償で公開することにより、世界の研究者に向けてデータを公開するとともに、話者コミュニティへの研究成果還元的一端を果たした。さらに30年度以降のアーカイブに向けて若手研究者児倉が自身のデータのアーカイブ・公開に向けて同様の共同研究を開始している。

(2) 一次データに基づくコーパスの構築：

メルボルン大学との共同研究による、危機言語・少数言語の一次データに転写・翻訳・文法情報などの情報を付し、電子コーパスとして整備・公開するという目標を順調に達成しつつある。29年度にメルボルン大学への派遣を受けた倉部・木本は同大学の Schnell 博士との共同研究によりジンポー語・アルタ語のコーパスをほぼ完成させている。コーパスは来年度中にケルン大学が運営するアノテーション付き口語テキストの多言語コーパス

(<https://lac.uni-koeln.de/en/multicast/>) から公開される予定である。塩原・澤田も事業期間中の公開に向け、コーパスを構築中である。

29年度に開始したオーストラリア国立大学(ANU)との共同研究による準パラレルコーパス SCOPIC の構築は、木本・倉部・塩原によりそれぞれイロカノ語、ジンポー語、インドネシア語に関して転写・翻訳のプロセスが終了しており、来年度、共同研究の枠組みによりアノテーション付与を行う基盤ができていると言える。

マレー語など比較的話者数が多い言語のコーパス構築・利用方法の確立に関する NTU との共同研究も順調に目標を達成しつつある。既に日本側ではマレー語・インドネシア語のコーパス検索システム MALINDO CONC を設計し、パイロット版を試験的に公開中である。さらに NTU との共同研究として今年度はコーパスを接頭辞、接尾辞などの形態情報で検索できるようにするために必要な形態情報辞書 (MALINDO Morph) の構築も完了し、

https://github.com/matbahasa/MALINDO_Morph で一般公開している。さらに、東京外国語大学が過去に受けた助成金の成果に基づく NTU との共同研究として、日本語、ビルマ語、マレー語、インドネシア語、英語のパラレルコーパス「東京外大アジア言語パラレルコーパス (TUFs Asian Language Parallel Corpus; TALPCo)」も構築した。これは、

<https://github.com/matbahasa/TALPCo> で一般公開している。この共同研究は、国際共著論文として29年度中に公開予定である。

(3) コーパスに基づく理論的研究：

コーパスに基づく理論的研究は上記(1)(2)の研究の到達点に位置するものである。この分野でも目標を順調に達成しつつある。具体的には、メルボルン大学との共同研究として個別言語の指示対象が取りうる形式とその文法関係・有生性との相関関係に関する数量的研究を継続しており、29年度までに、若手研究者倉部・木本と担当研究者塩原が論文を公開する形で一定の成果を出すことができている。

マレー語など比較的話者数が多い言語のコーパスに関しても上記の MALINDO CONC を利用する形で派生接辞や談話接辞の生起条件に関する研究を開始しており、期間内での成果を見込むことができる。

(4) 一次データに基づく言語の通時的変化に関する研究：

この分野でも目標を順調に達成しつつある。

チベット語・西夏語に関する SOAS との共同研究に関しては、担当研究者荒川が『プリンストン大学所蔵西夏文妙法蓮華経』をほぼ完成させ、来年度に刊行予定である。バントゥ諸語の分岐と通時的変化に関する SOAS との共同研究に関しては、Marten 教授らの招へいにより、共同研究の基盤になる130以上の文法項目を含むパラメータについて議論を行い、比較の手法を確定した。いずれのチームもすでに今後の具体的な共同研究への基盤を確立しており、研究期間内の到達目標達成が十分に期待できる。

4. 日本側研究グループ（実施主体）の研究成果発表状況（本年度分）

①学術雑誌等（紀要・論文集等も含む）に発表した論文又は著書

論文名・著書名 等	
<p>（論文名・著書名、掲載誌名、査読の有無、巻、最初と最後の頁、発表年（西暦）について記入してください。）（以上の各項目が記載されていれば、項目の順序を入れ替えても可。）</p> <p>・査読がある場合、印刷済及び採録決定済のものに限って記載して下さい。査読中・投稿中のものは除きます。</p> <p>・さらに数がある場合は、欄を追加して下さい。</p> <p>・著者名について、責任著者に「※」印を付してください。また、主担当研究者には<u>二重下線</u>、担当研究者については<u>下線</u>、若手研究者については<u>波線</u>を付してください。</p> <p>・海外の連携機関の研究者との国際共著論文等には、番号の前に「◎」印を、また、それ以外の国際共著論文等については番号の前に「○」印を付してください。また、主要連携研究者については<u>斜体・太下線</u>、連携研究者については<u>斜体・破線</u>としてください。</p>	
1	荒川慎太郎 (to appear) 『プリンストン大学所蔵西夏文妙法蓮華経』、210 頁、創価学会・東洋哲学研究所。
2	<u>Kimoto, Yukinori</u> . 2018. Operationalizing Philippine-type syntax for GRAID system: Clause structure, case marking, and verb class in Arta. <i>Asian and African Languages and Linguistics</i> 12. 17—35. 査読有
3	木本幸憲 (to appear). 「アルタ語における位置保持詞」中山俊秀・大谷直輝（編）『認知言語学と談話機能言語学の接点：経験基盤の言語学の構築に向けて』東京：ひつじ書房
4	木本幸憲 (to appear). 「言語ドキュメンテーションにおける ELAN 使用」細馬宏通・菊池浩平（編）『ELAN 入門（仮）』東京：ひつじ書房
5	<u>Nomoto, Hiroki</u> . 2017. Sintaksis nominalisasi bahasa Melayu. In Rogayah Abd. Razak and Radiah Yusoff (eds.) <i>Aspek Teori Sintaksis Bahasa Melayu</i> , 71—117. Kuala Lumpur: Dewan Bahasa dan Pustaka.
○	※ <u>Kartini Abd. Wahab & Hiroki Nomoto</u> . 2017. Konstruksi penaikan dan kawalan dalam bahasa Melayu. In Rogayah Abd. Razak and Radiah Yusoff (eds.) <i>Aspek Teori Sintaksis Bahasa Melayu</i> , 118-144. Kuala Lumpur: Dewan Bahasa dan Pustaka.
◎	※ <u>Nomoto, Hiroki, Kenji Okano, David Moeljadi & Hideo Sawada</u> . 2018. TUFS Asian Language Parallel Corpus (TALPCo). 『言語処理学会 第 24 回年次大会発表論文集』.
8	<u>Kurabe, Keita</u> . 2017. Reduplication and repetition in Jinghpaw. <i>Kyoto University Linguistic Research</i> 36: 1—19. 査読有
9	<u>Kurabe, Keita</u> . 2018. The loss of the proto-velar finals in Standard Jinghpaw. <i>Journal of the Southeast Asian Linguistics Society</i> 11.1:1—12. 査読有
10	<u>Kurabe, Keita</u> 2018 A classified lexicon of Jinghpaw loanwords in the Kachin languages. <i>Asian and African Languages and Linguistics</i> 12, 99—131. 査読有.
11	<u>Kurabe, Keita</u> . 2018. The GRAID-annotated Jinghpaw corpus: Annotations and initial findings. <i>Asian and African Languages and Linguistics</i> 12, 37—73. 査読有.
12	<u>Kurabe, Keita</u> (to appear) Tone and syllable weight: The tonotactic asymmetry in Jinghpaw. <i>Onsei Kenkyu (Journal of the Phonetic Society of Japan)</i> 21.3, 査読有, 採録決定済
13	<u>Kurabe, Keita</u> (to appear) Deaspiration and the laryngeal specification of fricatives in Jinghpaw. <i>Gengo Kenkyu (Journal of the Linguistic Society of Japan)</i> 153, 1—15. 査読有.

14	<u>Tokusu, Kurebito</u> (ed). 2018. <i>Chukchi animal folk tales with grammatical analysis</i> . ILCAA, Tokyo University of Foreign Studies. 92.pp.
15	<u>倉部慶太</u> (to appear) 「ミャンマーの「こぶ取り爺さん」:ジンポー語による民話テキスト」『アジア・アフリカ言語文化研究』95, 査読有, 採録決定済
16	<u>Asako Shiohara</u> . 2018. A Progress Report on Sumbawa Annotated-spoken Corpus: Tentative Annotation Notes. <i>Asian and African Languages and Linguistics</i> 12, 75—97. 査読有.
17	<u>Nakayama, Toshihide</u> . 2017. Polysynthesis in Nuuchahnulth, A Wakashan Language, <i>The Oxford Handbook of Polysynthesis</i> , 603—622.

②学会等における発表

発表題名 等	
<p>(発表題名、発表者名、発表した学会等の名称、開催場所、口頭発表・ポスター発表の別、審査の有無、発表年月(西暦)について記入してください。)(以上の各項目が記載されていれば、項目の順序を入れ替えても可。)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・発表者名は参加研究者を含む全員の氏名を、論文等と同一の順番で記載すること。共同発表者がいる場合は、全ての発表者名を記載し、責任発表者名は「※」印を付して下さい。発表者名について主担当研究者には<u>二重下線</u>、担当研究者については<u>下線</u>、若手研究者については<u>波線</u>を付して下さい。 ・口頭・ポスターの別、発表者決定のための審査の有無を区分して記載して下さい。 ・さらに数がある場合は、欄を追加して下さい。 ・海外の連携機関の研究者との国際共同発表には、番号の前に「◎」印を、また、それ以外の国際共同発表については番号の前に○印を付して下さい。また、主要連携研究者については<u>斜体・太下線</u>、連携研究者については<u>斜体・破線</u>としてください。 	
1	<u>Sawada, Hideo</u> . “Examining grammaticalization in Lhaovo.” Paper presented in “Workshop on Grammaticalization and Language Contact in Asia and Beyond”, School of Humanities, Nanyang Technological University, 4-5 October 2017.口頭発表・審査なし(招待)
○ 2	※ <u>Shiohara, Asako</u> and Anthony Jukes. “Development of two definite marking strategies in Manado Malay, The Twenty-First International Symposium on Malay/Indonesian Linguistics (ISMIL 21), Langkawi Research Center, 4-6 May 2017. 口頭発表・審査あり
◎ 3	※ <u>Arka, I Wayan</u> and <u>Asako Shiohara</u> . “Plurality and comitative-inclusory constructions in the languages of Indonesia, Conference of the Association for Linguistic Typology, Australian National University, 12-14 Dec, 口頭発表・審査あり
4	<u>Shinagawa, Daisuke</u> . “On some typological characteristics and their group-internal variation in Kilimanjaro Bantu languages”, SOAS linguistics departmental seminar series, SOAS, University of London, 31 Oct 2017, 口頭, 審査なし.
5	<u>品川大輔</u> , 「シェンの2つの流動性」, 日本アフリカ学会第54回学術大会, 信州大学, 2017年5月20日, 口頭発表・審査なし
6	<u>品川大輔</u> , 「スワヒリ語を基盤とする都市混合言語における新たな文法特徴の創出」(ワークショップ「スワヒリ語圏アフリカにおける多言語状況の実態—言語接触状況下での多様な言語現象から捉える—」(企画・司会:品川大輔)), 日本言語学会第154回大会, 首都大学東京, 2017年6月25日, 口頭発表・審査あり
7	<u>木本幸憲</u> (2017) 「状態性と事態解釈:アルタ語(フィリピン)に見られる非動作動詞」日本言語学会第155回大会、立命館大学、2017年11月25日(口頭発表、審査有り)

8	<u>Kimoto, Yukinori</u> .(2018) “Linguistic devices for indexing gestures in Arta (Philippines): (u)wa ‘what-cha-ma-call-it’ as a placeholder and beyond” Paper presented at the first Seminar on the development of intersubjective recognition. Kyoto University, March 2018. (口頭、査読無し)
9	<u>木本幸憲</u> (2018) 「フィリピン言語のヴォイスと格に関する談話的アプローチ：アルタ語のケーススタディから見える姿」京都語用論研究会、京都工芸繊維大学、2018年3月（口頭、審査無し）
10	※ <u>Nomoto, Hiroki</u> , Shiro Akasegawa & <u>Asako Shiohara</u> . 2017.5. Reclassifying the Leipzig Corpora Collection for Malay/Indonesian. The 21st International Symposium on Malay/Indonesian Linguistics (ISMIL). マレーシア国民大学ランカウイ研究センター。口頭発表、審査あり。
11	※ <u>野元裕樹</u> , <u>赤瀬川史朗</u> , <u>塩原朝子</u> . 2017.6. 類似言語におけるウェブコーパス整備：マレー語とインドネシア語の言語判定の事例。日本言語学会第154回大会。首都大学東京。口頭発表、審査あり。
12	※ <u>Nomoto, Hiroki</u> , Shiro Akasegawa & <u>Asako Shiohara</u> . 2017.7. Identifikasi bahasa dalam pembinaan korpus web bahasa Melayu/Indonesia. The 4th Atma Jaya Conference on Corpus Studies (ConCorps 2017). インドネシア、アトマジヤ・カトリック大学。口頭発表、審査あり。
13	<u>Nomoto, Hiroki</u> . 2018.3. Variations in Austronesian bare passive agents. Current Issues in Comparative Syntax: Past, Present, and Future. シンガポール国立大学。ポスター発表、審査あり。
○ 14	※ <u>Nomoto, Hiroki</u> , <u>Kenji Okano</u> , David Moeljadi & <u>Hideo Sawada</u> . 2018.3. TUFS Asian Language Parallel Corpus (TALPCo). 言語処理学会第24回年次大会。岡山コンベンションセンター。口頭発表、審査あり。
15	<u>Kurabe, Keita</u> (2017) The laryngeal specification of fricatives in Jinghpaw. Paper presented at La Trobe Sino-Tibetan day (La Trobe University, Melbourne, Australia) 2017年11月24日、口頭発表、審査無
16	<u>Kurabe, Keita</u> (2017) Eclipse as an areal calque in East and Southeast Asia. Paper presented at LAL-seminars (The University of Melbourne, Australia) 2017年9月15日、口頭発表、審査無
17	<u>Kurabe, Keita</u> (2017) What eats the sun and moon? Eclipse as an areal calque in East and Southeast Asia. Paper presented at CRLD Research Seminar (La Trobe University, Melbourne, Australia) 2017年9月12日、口頭発表、審査無
18	※ <u>大塚行誠</u> ・ <u>倉部慶太</u> (2017) 「ティディム・チン語とジンポー語における方向接辞の対照」日本言語学会第155回大会(立命館大学) 2017年11月26日、口頭発表、審査有

5. 若手研究者の派遣実績（計画）

【海外派遣実績（計画）】

年度	平成28年度	平成29年度	平成30年度	合計
派遣人数	3人	4人 (3人)	4人 (2人)	6人

※当該年度は実績、次年度以降は計画している人数を記載

【本年度の海外派遣実績】

派遣者①の氏名・職名：野元 裕樹・准教授

(当該若手研究者の国際共同研究における役割を含めた具体的な研究活動)
 ナンヤン工科大学のボンド准教授および同氏の主宰する計算言語学研究室のメンバーと共同でマレー語・インドネシア語の大規模コーパスを形態情報で検索することができるようにするための形態情報辞書およびアジア言語パラレルコーパスの開発を行った。また、それを用いてマレー語・インドネシア語の文法分析を行った。

(具体的な成果)

マレー語・インドネシア語の大規模形態情報辞書 MALINDO Morph とアジア言語パラレルコーパスは、派遣者の GitHub ページ (<https://github.com/matbahasa/>) で公開した。また、それらの開発について、The 13th Workshop on Asian Language Resources (2018年5月)、言語処理学会(2018年3月)において発表し、論文が予稿集に掲載される。また、大規模コーパスの検索システム MALINDO Conc のプロトタイプ版を完成させた。近日中に一般公開する予定である。また、MALINDO Conc を文法研究に用いて、国際ワークショップ Current Issues in Comparative Syntax で発表した。

派遣先 (国・地域名、機関名、部局名、受入研究者)	派遣期間			合計
	平成 28 年度	平成 29 年度	平成 30 年度	
オーストラリア、メルボルン大学、言語学科、Nicholas Thieberger 博士	61 日	0 日	0 日	61 日
シンガポール、ナンヤン工科大学、言語学・多言語研究科、Francis Bond 准教授	0 日	249 日	0 日	249 日
インドネシア、Atma Jaya 大学 (The 4 th Atma Jaya Conference on Corpus Studies にて発表)	0 日	2 日	0 日	2 日
マレーシア、マレーシア国民大学 (マレー語談話データの収集)	0 日	11 日	0 日	11 日

派遣者④の氏名・職名：倉部 慶太・ジュニアフェロー

(当該若手研究者の国際共同研究における役割を含めた具体的な研究活動)
 ナンヤン工科大学では、本事業の主眼の1つである「言語の通時的変化・分岐に関する研究」を進めた。また、メルボルン大学では本事業の主眼である(1)「言語データのアーカイブ化」、(2)「言語コーパス構築」、(3)「構築したコーパスを利用した理論的研究」を行った。

(具体的な成果)

ナンヤン工科大学での共同研究：シナ・チベット語族の言語変化に関する査読論文 (Kurabe 2018) を執筆した。

メルボルン大学での共同研究：1) ビルマの少数民族語ジンポー語の民話 1805 本のアーカイブ化と公開、(2) 一次資料に基づく言語コーパス構築、(3) 構築したコーパスに基づく理論的研究に関する査読論文 Kurabe(2018)の執筆。

派遣先 (国・地域名、機関名、部局名、受入研究者)	派遣期間			合計
	平成 28 年度	平成 29 年度	平成 30 年度	
オーストラリア、メルボルン大学、言語学科、Nicholas Thieberger 博士	0 日	242 日	0 日	242 日
シンガポール、ナンヤン工科大学、言語学・多言語研究科、Randy LaPolla 教授	2 日	61 日	0 日	63 日

ニュージーランド、オークランド大学（資料収集）	0日	2日	0日	2日
-------------------------	----	----	----	----

派遣者⑤の氏名・職名：岡野 賢二・准教授

<p>（当該若手研究者の国際共同研究における役割を含めた具体的な研究活動）</p> <p>ナンヤン工科大学では本事業の主眼の1つである本事業の主眼である「言語コーパス構築」を進めた。また、ロンドン大学 SOAS では本事業の主眼の1つである本事業の主眼である「言語コーパス構築」「言語の分岐と変化に関する研究」を進めた。</p> <p>（具体的な成果）</p> <p>ナンヤン工科大学では Francis Bond 准教授とともに日本語・英語・マレー語・インドネシア語・ビルマ語の平行コーパス（TALPco）を作成した。またロンドン大学 SOAS デハ、Justin Watkins 教授とともにビルマ語碑文コーパスの規格・それを用いての研究の方向性を策定した。</p>				
派遣先 （国・地域名、機関名、部局名、受入研究者）	派遣期間			合計
	平成 28 年度	平成 29 年度	平成 30 年度	
シンガポール、ナンヤン工科大学、言語学・多言語研究科、Francis Bond 准教授	0日	69日	0日	69日
英国、ロンドン大学東洋・アフリカ研究学院（SOAS）、言語学科、Justin Watkins 教授	0日	162日	90日	252日

派遣者⑧の氏名・職名：木本 幸憲・日本学術振興会特別研究員（名古屋大学）

<p>（当該若手研究者の国際共同研究における役割を含めた具体的な研究活動）</p> <p>木本幸憲は、3月31日～5月30日の間、メルボルン大学言語学科に滞在し、(i) 木本の専門であるアルタ語の記述的研究を、特に動詞の形態論を中心に進め、(ii) アルタ語のモノログ、インタビュー談話を、メルボルン大学の Stefan Schnell 氏とともにデータベース化し、ソフトウェア ELAN 上で検索可能なコーパスを作成するための基本的枠組みを構築する作業を行った。(i)に関しては、これまで木本が収集した量的データを元に、アルタ語の文法の中でもっとも複雑な体系をなす動詞がどのように分類・記述できるかというリサーチクエスチョンを立て、受入研究先の Nicholas Thieberger 氏とのディスカッションを通じて、探索的研究を行った。(ii)に関しては、アルタ語というフィリピンの言語に特有な文法的振る舞いをどのように一般言語学的な枠組みからタグ付けし、他の言語と比較可能にするのかについて Stefan Schnell 氏とディスカッションし、多くの修正を重ねながら、徐々に枠組みを構築していった。このデータは、文法関係と情報構造との関係をさぐる通言語的プロジェクト GRAID (Grammatical Relation and Animacy in Discourse) の枠組みを援用するものであり、今後アルタ語と他の言語の比較を行うために用いられるものである。</p> <p>（具体的な成果）</p> <p>まず(i)の成果として、メルボルン大学の定例研究会（2017年5月17日）にて“Verbal Morphology and Event Classification in Arta: A Northern Philippine Language”というタイトルで招待講演を行い、メルボルン大学言語学科の諸氏から有益なコメントを頂いた。その成果は、日本言語学会第155回大会（2017年11月25日、立命館大学）にて「状態性と事態解釈：アルタ語（フィリピン）に見られる非動作動詞」という題目で発表を行い、</p>				
---	--	--	--	--

その発表は同学会より大会発表賞が授与された。(ii)の成果としては、Stefan Schnell氏とともにディスカッションした内容を元に、アルタ語のコーパスを作成するにあたって当初の枠組みをどのように適用し、アルタ語特有の文法現象に対応させるためにアノテーションをどのように追加したかを議論した論文が査読つき雑誌 *Asian and African Languages and Linguistics* より出版予定である。

派遣先 (国・地域名、機関名、部局名、受入研究者)	派遣期間			合計
	平成 28 年度	平成 29 年度	平成 30 年度	
オーストラリア、メルボルン大学、言語学科、Nicholas Thieberger 博士	2 日	61 日	0 日	63 日
英国、ロンドン大学東洋・アフリカ研究学院 (SOAS)、言語学科、Nathan Hill 准教授	0 日	0 日	240 日	240 日

※本年度の派遣者毎に作成すること。

6. 研究者の招へい実績 (計画)

【招へい実績 (計画)】

年度	平成 28 年度	平成 29 年度	平成 30 年度	合計
招へい人数	11 人	6 人 (5 人)	9 人 (8 人)	13 人

※当該年度は実績、次年度以降は計画している人数を記載

【本年度の招へい実績】

招へい者①の氏名・職名：Nicholas Evans・特別教授

(当該研究者の国際共同研究における役割を含めた具体的な研究活動) 担当研究者渡辺・塩原、若手研究者児倉・木本・倉部と「言語コーパス構築」「コーパスを利用した理論的研究」の枠組みで共同研究を行った。 (具体的な成果) 少数言語・危機言語を含む多言語 SCOPIC プロジェクトのワークショップを開催し、コーパス構築の枠組みを共有した。その枠組みにより、日本側研究者が持ち寄った言語データ (音声・ビデオ) に関して、転写・翻訳を行うとともに、SCOPIC の文法的アノテーションの枠組みのうち、human reference と reported speech に関するアノテーションを付すという形で各研究者のパラレルコーパスの基盤が完成した。				
招へい元 (機関名、部局名、国名) 及び 日本側受入研究者 (機関名)	招へい期間			合計
	平成 28 年度	平成 29 年度	平成 30 年度	
オーストラリア国立大学、言語学科、オーストラリア 中山 俊秀 (東京外国語大学)	3 日	10 日	7 日	20 日

招へい者②の氏名・職名：I Wayan Arka・准教授

(当該研究者の国際共同研究における役割を含めた具体的な研究活動)
 担当研究者渡辺・塩原、若手研究者児倉・木本・倉部と「言語コーパス構築」「コーパスを利用した理論的研究」の枠組みで共同研究を行った。

(具体的な成果)
 担当研究者塩原との共同研究により、コーパスに基づくインドネシア諸語の数に関する研究を遂行し、その成果を Arka and Shiohara (2017)の形で国際類型論学会において発表した。また、少数言語・危機言語を含む多言語 SCOPIC プロジェクトのワークショップに参加し、コーパス構築の枠組みを共有した。その枠組みにより、バリ語のコーパスを塩原と共同で構築した。

招へい元（機関名、部局名、国名）及び 日本側受入研究者（機関名）	招へい期間			合計
	平成 28 年度	平成 29 年度	平成 30 年度	
オーストラリア国立大学、言語学科、オーストラリア 塩原 朝子（東京外国語大学）	8 日	15 日	7 日	30 日

招へい者④の氏名・職名：Stefan Schnell・ポスドク研究員

(当該研究者の国際共同研究における役割を含めた具体的な研究活動)
 担当研究者澤田・塩原、若手研究者木本・倉部と「言語コーパス構築」「コーパスを利用した理論的研究」の枠組みで共同研究を行った。

(具体的な成果)
 日本側研究者の少数言語・危機言語のデータに基づくコーパス構築を行った。具体的には、Schnell 博士が Geoffrey Haig 博士(Bamberg 大学)と開発した談話における文法関係と有生性 (Grammatical Relations and Animacy in Discourse; GRAID)に関するアノテーションを共同で行った。この共同研究により、ジンポー語、アルタ語コーパスが完成し、来年度中に公開できる状態となった。また、若手研究者倉部・木本と担当研究者塩原は Schnell 博士との共同研究により上記のアノテーションに基づく理論的研究を進め、論文を執筆・公刊した。

招へい元（機関名、部局名、国名）及び 日本側受入研究者（機関名）	招へい期間			合計
	平成 28 年度	平成 29 年度	平成 30 年度	
メルボルン大学、言語学科、オーストラリア 塩原 朝子（東京外国語大学）	20 日	29 日	20 日	69 日

招へい者⑥の氏名・職名：Nathan Hill・准教授

(当該研究者の国際共同研究における役割を含めた具体的な研究活動)
 Hill 博士は担当研究者荒川と、西夏語文献・チベット語文献をコーパスとして用いた研究を行った。

(具体的な成果)
 Hill 博士は 12/10 に神戸学園都市 UNITY で開催された、チベット＝ビルマ言語学研究会第 43 回会合に出席し、チベット語コーパスを用いた自身の研究発表を行った。また上記荒川が 2018 年に刊行する書籍の、西夏語コーパス（テキスト編）部分に関して監修を行った。

招へい元（機関名、部局名、国名）及び 日本側受入研究者（機関名）	招へい期間			合計
	平成 28 年度	平成 29 年度	平成 30 年度	

ロンドン大学東洋・アフリカ研究学院 (SOAS)、言語学科、英国 荒川 慎太郎 (東京外国語大学)	15 日	13 日	7 日	35 日
---	------	------	-----	------

招へい者⑩の氏名・職名：Sonja Riesberg・ポスドク研究員

<p>(当該研究者の国際共同研究における役割を含めた具体的な研究活動) 担当研究者塩原、若手研究者木本と「言語データのアーカイブ」の枠組みで共同研究を行った。</p> <p>(具体的な成果) 招へい中に“The language archive at CELD, West Papua – a collaborative undertaking”と題する講演を行い、Riesberg 博士が中心となりインドネシア・パプア州の危機言語調査センター CELD で設置・運営している言語アーカイブの情報を共有した。この講演および招へい中の研究打ち合わせにより、日本側研究者塩原は本事業終了後東京外国語大学に設置予定の言語アーカイブに関する知見を得た。</p>				
招へい元（機関名、部局名、国名）及び 日本側受入研究者（機関名）	招へい期間			合計
	平成 28 年度	平成 29 年度	平成 30 年度	
オーストラリア国立大学、言語学科、 オーストラリア 塩原 朝子 (東京外国語大学)	13 日	13 日	0 日	26 日

招へい者⑪の氏名・職名：Danielle Barth・ポスドク研究員

<p>(当該研究者の国際共同研究における役割を含めた具体的な研究活動) 担当研究者渡辺・塩原、若手研究者児倉・木本・倉部と「言語コーパス構築」「コーパスを利用した理論的研究」の枠組みで共同研究を行った。</p> <p>(具体的な成果) 少数言語・危機言語を含む多言語 SCOPIC プロジェクトのワークショップを開催し、コーパス構築の枠組みを共有した。その枠組みにより、日本側研究者が持ち寄った言語データ（音声・ビデオ）に関して、転写・翻訳を行うとともに、SCOPIC の文法的アノテーションの枠組みのうち、human reference と reported speech に関するアノテーションを付すという形で各研究者の平行コーパスの基盤が完成した。</p>				
招へい元（機関名、部局名、国名）及び 日本側受入研究者（機関名）	招へい期間			合計
	平成 28 年度	平成 29 年度	平成 30 年度	
オーストラリア国立大学、言語学科、 オーストラリア 塩原 朝子 (東京外国語大学)	0 日	10 日	7 日	17 日

※本年度の招へい者毎に作成すること。

7. 翌年度の補助事業の遂行に関する計画

※ 補助事業が完了せずに国の会計年度が終了した場合における実績報告書には、翌年度の補助事業の遂行に関する計画を附記すること。